修士論文要旨

前田勝洋の教育観に関する研究

岩田　龍明

(生活科教育領域)

Ⅰ　論文の構成

はじめに

第一章　前田勝洋のライフヒストリー

第一節　教育学におけるライフヒストリー研究の特徴と方法

第二節　修学時代から附属小学校勤務

第三節　市教育委員会を経て管理職へ

第四節　教職退職後から現在

第二章　前田勝洋に影響を与えた人物と同時代に活躍した人物

第一節　子どもと教師が「する立場」に立つ東井義雄の授業・学級・学校づくり

第二節　教師の力量を高める斉藤喜博の授業・学級・学校づくり

第三節　有田和正の授業づくりと前田勝洋

第三章　前田勝洋の授業実践と授業観

第一節　単元「二七市」における単元構想と教師の願い

第二節　単元「ぼくたちの附属小学校 給食のおばさん」の授業づくり

第三節　附岡小の実践からみる前田勝洋の授業観

第四章　前田勝洋と後進育成の教育実践

第一節　授業を核とする前田勝洋の学校経営と「ワザと仕掛け」の伝播

第二節　前田勝洋の教育観と現在の授業実践事例①–刈谷市立衣浦小学校　第一学年　生活科–

第三節　前田勝洋の教育観と現在の授業実践事例②–衣浦小　第一学年　国語–

おわりに

Ⅱ　研究の目的と方法

平成 20 年の小学校学習指導要領解説・生活編、第 5 章指導計画の作成と学習指導、2. 学習指導の特質では、「生活科で学ぶ児童の姿は様々に広がり、一人一人にその児童の個性が反映されている。生活科では、そうした多様な児童の発言やしぐさを丁寧に見取り、指導に生かしていくことが大切である[1)]」と述べられている。このように一人ひとりの児童の考え方を大切に見取り指導に生かしていくことは、今日の教師に求められている資質であると考える。

そこで本研究では、「一人ひとりを大切にする」教育観の具体を探るために、前田勝洋氏の教育観に着目する。前田は 1942 年に生まれ、愛知学芸大学を卒業後、教師の道を歩み始める。小・中学校それぞれの勤務を経験し、1978 年に愛知教育大学附属岡崎小学校(以下、附岡小と記述)に赴任。専門の社会科を中心に実践を重ねる。授業者として実践を重ねた後、1985 年に教育委員会に配属され、1987 年より管理職となって再び現場に戻った。2003 年に退職した現在もなお、大学の非常勤講師・多くの学校への「学校行脚」と称した後進育成の活動・著書の執筆に取り組んでおり、彼の後進育成活動は多岐に渡っている。

前田の教育観は、自身の育ちや経験などに裏打ちされているため、本研究ではライフヒストリーの手法を援用しながら、その教育観を探ることとする。そのため本研究では、前田勝洋のライフヒストリー、前田勝洋が影響を受けた人物の言説、前田勝洋の附岡小時代の実践、現在指導に赴いている学校の授業を分析することで、前田勝洋の教育観を歴史的・全体的なアプローチで明らかにする。

Ⅲ　研究の概要

第一章　前田勝洋のライフヒストリー

第一節

第一節では、ライフヒストリー研究の起源、変遷、特徴、方法について述べた。高井良(1994)によれば、ライフヒストリーが発展する契機になった研究は、トーマス・ズナエニツキ『生活史の社会学-ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(1918-20年)である[2]。この方法は、主に社会学の分野で発達し、日本では中野卓編著(1977)『口述の生活史』を代表する研究として挙げられる。

ここで言う「ライフヒストリー」とは、インタビューで語られる様々な時間の「人生」を「それぞれの話題のなかで語られた内容をもとに整理[3]」し、「特定の話者から自分史を聞きとり、口述してもらったその録音記録を面接者自身が文字に起し、その忠実な文字起こしを、時系列的に編集し註記を添える[4]」ことによって作成するものである。

ライフヒストリー研究は 1980 年代から、教育学の分野でも用いられるようになってきた。現在の動向として、ライフヒストリー研究は教師一般の育ちを探る研究から、一人の教師の個性的な育ちや実践と教師の育ちの関係性へと焦点を当てる研究が増えている傾向にある。つまり教育学におけるライフヒストリー研究は、一人の個性的な存在としての教師のライフヒストリーとそのいくつかの実践を結びつけて分析・解釈することで、教師の実践を深く理解するための手法だと言える。

第二節　修学時代から附属小学校勤務

第二節から第四節までは、前田へのインタビューを基に構成したライフヒストリーから、それぞれの時代におけるキーワードを、《　》を用いて記述する。

前田は小・中学校時代に、教師や同級生からいじめをうけたことや、身体測定において人権侵害をするような行動をされたことが、自身の教育観を根底から支えていると述べている。ここから筆者は、前田の教育観に《弱者の立場に立つ》というキーワードがあると捉えた。前田は中学卒業後、安城農林高校に進学したが、実家の農家が伊勢湾台風で荒れに荒れ、それに追い打ちをかけるように池田内閣の「所得倍増計画」が施行され、生活が苦しかったこと、進路に悩んだことについて、繰り返し語っている。ここから、《貧しい中の辛い生活》や《生き方の模索》がこの時期のキーワードであると捉えた。

結局前田は、高校卒業後、愛知学芸大学に進学し、人一倍勉強するようになったという。ここから、《「自ら学ぶ」という成長観》をもつようになったと考えられる。

前田は大学を卒業後、旭が丘中学校に赴任し、部活や教える授業に打ち込んでいたと語る。しかし挙母小学校に赴任し、新城市立東郷東小学校の鈴木仁志教諭の授業と出会う。この授業との出会いが、前田の授業観の転機である。これを期に前田は、《「子どもありき」の授業》を志向するようになった。その後、附岡小に赴任し、《「子どもありき」の授業》を展開していった。

第三節　市教育委員会を経て管理職へ

第三節では、教育委員会の勤務及び管理職期のライフヒストリーについて記述した。教育委員会を経験した前田は、学校の「荒れ」が原因で、教師たちが疲れていることを痛感したと述べる。その後、梅坪小学校に教頭として赴任。初めは職員と関わることに苦労をしたが、二人の若い教師の学級を立ち直らせたことを契機として、前田の評判が職員間に広まった。ここから前田は、授業や学級づくりの話を職員とするようになる。このときの語りから、前田が《授業づくりと学級づくりの一体的な捉え》をもつことや《「子どもありき」の授業》として《子ども同士がかかわる授業》を理想としていることが読み取れた。この考えについては、附岡小で勤務していた頃から形成されていたことが実践記録より明らかになる。

校長期は、梅坪小・山之手小・小清水小の三期に分けられる。前田は、運営が困難な学校に赴任した。

その中で前田は、《一人ひとりの教師に寄り添う》学校づくりを行いながら、《日常的な授業の鍛錬》を推し進め、それにより《教師の実践共同体の構築》を行なった。

第四節　教職退職後から現在

第四節では、前田が様々な学校に指導に赴く『学校行脚』への思いや授業づくりや学校づくりのノウハウについて記した著作への思いを記した。

前田は学校行脚をする中で、授業を公開した教師が、「また頑張ろう」と思えるように指導をすることなどから、《教師としてのやりがいの実感・共有》を図ろうとしている。またノウハウを記した著書には、ハウツーに終始することを恐れながら、「ちょっと無理して頑張る」ことをすれば、子どもがかかわり合う授業ができるというワザや仕掛けを記している。これは、《かかわり合う授業方法の伝達》というキーワードとして捉えられる。

第二節から第四節までのキーワードは、図１のように配列できる。

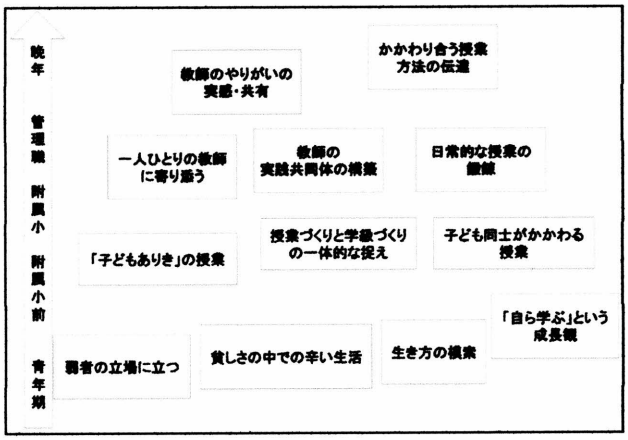

図１　ライフヒストリーから抽出したキーワード

第二章　第一節　第二節　第三節

第二章では、インタビューや実践などから、前田に影響を与えていると分かる、東井義雄・斉藤喜博、及び前田と同様に「社会科の初志をつらぬく会」(以下、「初志の会」と記す)に所属し、同じ時代に活躍する有田和正を取り上げた。東井義雄・斎藤喜博は、それぞれの文献から前田が学んだと捉えられる、授業づくり・学級づくり・学校づくりの記述を引用し、考察した。その際、キーワードを〈　〉で記した。

東井は、子どもを常に成長したいと願う存在であり、その願いを沸き立たせながら、子どもを育てていくことが授業における教師の役割だと示している。また東井は、学級づくりにおいて子ども一人ひとりが学級の「主人公」となり学級を良くしていくことを理想としている。そして学校づくりも同様に、一人ひとりの教師が学校づくりをさせられるのではなく自ら取り組む立場に立つこと、つまり学校づくりの「主人公」になることを示している。そのためには、一人ひとりの教師に寄り添い励ますこと、「ふだん着のままの授業研究」によって教師の力を高めることを望んだ。

斉藤喜博は、子どもの可能性を最大限に引き出す教育を目指していた。斉藤は子どもの可能性を引き出すために、教師がただ教え込むのではなく、子ども同士が互いに考えを出しあい、学び合うような授業を理想としていた。そのため斉藤は、どんな子どもの考えも学級に位置づけようと、子どもの間違いを「××ちゃん式まちがい」と名付け、学級に間違いが怖くない雰囲気をつくろうとした。この考え方は、職員同士が互いの苦悩や失敗に学び合うときに生まれた発想であり、教師同士の関係もまた、失敗を披露できるような関係でありたいと、斉藤は願っていたと考えられる。

有田和正については、彼の授業づくりの変化を実践記録から分析・考察した。有田が「初志の会」の会員であった初期の実践は、この会の理念に即す実践だった。しかし彼が筑波大附属小に赴任後、独自のスタイルの実践を展開していった。有田の異なる時期の実践を比較しながら、前田が有田から学んだ点、異なる考えをもつ点を整理することで、前田の授業づくりに関わるキーワードを抽出した。ここでは前田が、有田の発問の仕方と子どもたちの授業の参加の関係に着目しながら、〈全員参加の授業〉前提としていることが明らかになった。

第二章で抽出できたキーワードを、図１と関連づけると図２のように示すことができる。

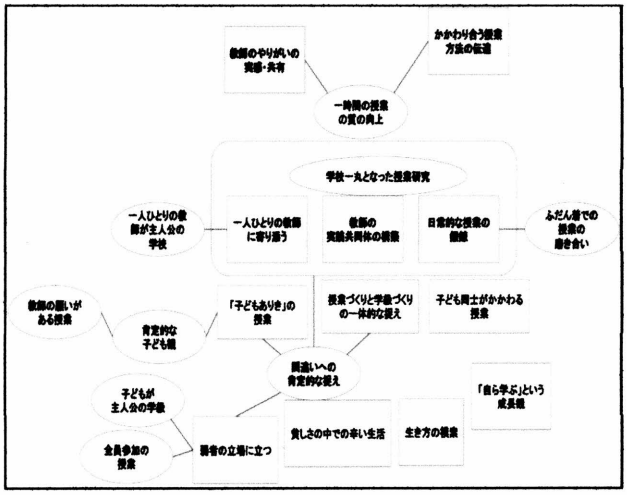

図 2　第二章のキーワードとライフヒストリーキーワードの関連図

第三章　前田勝洋の授業実践と授業観

ここでは、前田が愛知教育大学附属岡崎小学校に勤務していた時期の研究単元について考察した。第一節では、単元の開発と教師の経験との関わりについて、第二節では、単元構想や授業記録から、前田が示している授業づくり・学級づくりの理論が、前田自身の実践でどのように取り組まれていたかについて、考察した。

第一節

第一節では、前田が附岡小に赴任して初めて取り組んだ研究単元である、岡崎の「二七市」(第三学年、社会科)の実践を取り上げた。この単元は、インタビューの中でもっとも印象的に語られる単元である。

単元「二七市」は、前田の青年期のライフヒストリーが、単元開発に大きく影響している。前田は農家に生まれ、青年期には農家である実家が伊勢湾台風による大きな被害、池田内閣の所得倍増計画の影響もあり、苦しい生活を強いられていた。そのことと、附岡小の子どもたちが裕福であることを対比的に捉え、目の前の子どもたちとは異なる生き方をする「二七市」の人々と出会わせようとした。「二七市」は、二と七のつく日にだけ、岡崎市の八幡町に開催される市場である。ここで店を出す人々は、デパートで働く人のようにきらびやかな姿でなければ、売り物もスーパーのもののようにきれいに並べられているわけではなく、泥がついていたり、形が不揃いであったりした。前田は、このような商売形式・人々の暮らしと子どもたちを出会わせることで、子どもたちが《生き方の模索》をする契機になることを願っていた。

単元「二七市」では、子どもたちがそれぞれ「二七市」に出かけ、自分の興味関心をもったことについて調べる「ひとり調べ」を行いながら、授業が展開される。子どもたちは「ひとり調べ」を行いながらも、自分のやりたいこと・やるべきことが分からなくなることがある。このとき、前田は子どもと対話し、その子のこれまでの「ひとり調べ」を振り返り、「ひとり調べ」を方向づける支援を行なっていた。

この単元では「ひとり調べ」が進む中で、一人の子どもの「ひとり調べ」の方法や内容の発表に基づいて、学級全体で話し合う授業がある。この話し合いについて、前田が一人の子どもを対象にして授業を展開することによる学級の学びと、一人の子どもにとっての学びの意義を考察している。ここから、前田が授業を通して〈互いに学び合う学級づくり〉を目指していたことが読み取れた。

第二節

第二節では、前田が最後に担任をもった年の研究単元である「ぼくたちの附属小学校　給食のおばさん」(第一学年、社会科)の実践を取り上げた。この実践は、第一学年の研究単元ということもあり、前田が理想とする授業づくり・学級づくりへの方法論や理論が単元構想の中に含まれている。そして、この単元の授業記録は、子ども同士がかかわり合う様子だけでなく、教師が子どもに対して働きかける場面が多く記述されているため、前田の授業に対する考えが明確に現れていると考えられる。

この単元は、入学して間もない一年生の子どもたちと取り組んだ単元である。そのため前田は、入学

期の子どもにとっての学びとは何かについて捉え、学級の集団づくりの基礎を培い、一人ひとりの子どもが個性を発揮できるような支援を行なうことで、子どもを生かす授業を構想している。

この単元の授業記録からは、教師が子どもの考えを受容するかかわり、子どもなりの考えを引き出す働きかけ、子どもの発言を促す「待つ」姿勢など、子どもの考えを授業に位置づけながら、授業を展開する前田の姿を読み取ることができた。

第三節

第三節では、第一節・第二節から抽出したキーワードに基づいて前田の授業観の概念図を構成した。第一節と第二節から抽出したキーワードを整理し、図3のように示した。

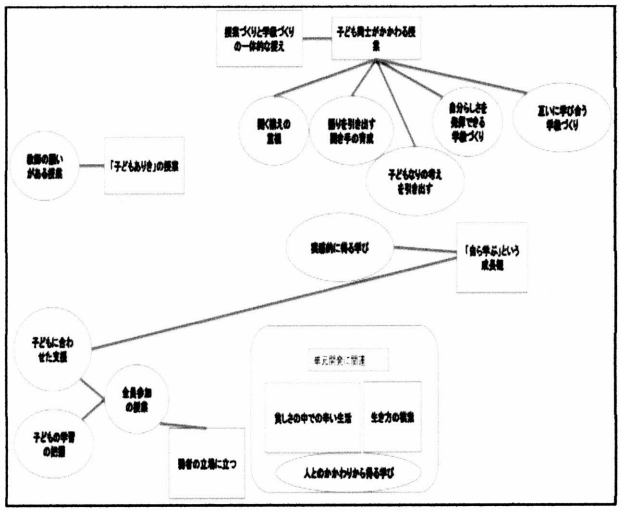

図3　岡附小の実践からみる前田の授業観概念図

第四章　前田勝洋と後進育成の教育実践

第四章では、前田勝洋の授業・学級・学校づくりの理論について述べ、前田が校内研修の助言者として招かれている小学校の授業を分析することで、前田の教育観を、授業での具体的な子どもと教師の姿から考察した。

第一節

第一節ではまず、前田が著書で示す目指す子ども像・教師像について示した。前田は、理想の子ども像として「①授業に積極的に参加する子ども・五感を磨き、『見つけ』のできる子どもに・③歯を食いしばって、がんばる子ども・④自分から発言して、聞き合いながら、『学び』を深める子ども[5]」の四点にまとめている。ここでは、子どもが《「自ら学ぶ」という成長観》を得ようとすることと、目指す子ども像との関連が大きいことが分かった。

そして前田が目指す教師像として、「①子どもの側に立つ教師になろう・②子どもを授業という『バス』に乗せよう・③授業の武器である『話し言葉』を磨こう・④隣の人(教師)に学ぼう[6]」の四点を示している。これらの教師像と、これまで抽出してきたキーワードは、《「子どもありき」の授業》を展開する《教師の実践共同体の構築》のために、《日常的な授業の鍛錬》を行なうことの必要性を、「話し言葉」を磨くことを通じて伝えようとしていると考えられる。

次に、これまで述べてきた目指す子ども像・教師像を授業づくり・学級づくりの方法論を体系化した「ワザと仕掛け」と、前田の学校づくり論について考察した。前田はこの「ワザと仕掛け」を考えるにあたって、子どもが短い授業時数の中で〈全員参加の授業〉を行ないながら、いかにその子らしさが出せる授業ができるかについて考え、指導助言や方法論の提案を行なっている。

そして、前田は管理職を経験した立場から「教室こそが、授業実践の現場であり、学校経営の現場です[7]」と述べていることからも、授業を核とした学校経営を行なおうとしていたことが分かる。また授業を核として、授業の知識について共有することこそ、《教師の実践共同体の構築》のために必要不可欠であることを示している。

第二節　第三節

ここでは、前田が十年ほど前から助言に携わっている、刈谷市立衣浦小学校の授業を分析した。第二節・第三節では、第一学年の生活科と国語を分析対象とし、前田の理想とする授業・学級の具体的な姿を授業記録から明らかにした。

二つの授業の分析から、子どもたちが互いに考えをつなげ合う姿、子どもが自ら学ぼうとする姿、子

どもが自らの課題に対して必死に取り組む姿を読み取ることができた。そしてそのような子どもの姿の背景には、一人ひとりの子どもを捉えた支援や、学級集団へのはたらきかけがあると明らかになった。

Ⅳ　研究の成果と今後の課題

これまで示してきた前田の教育観を表すキーワードを整理し、第四章の考察を踏まえて教師と子どもの具体的な姿についての記述を丸四角に記述すると、図４のように表すことができる。前田勝洋の教育観には、授業で子どもを育てるという確固たる信念がある。そして前田の教育観は、その信念を学校全体で共有しようとすることにも特徴がある。

本研究の今後の課題は、三つある。一つ目は、前田の教育観に影響を与えた人物についてより幅広く人物を選出し、文献研究を行なうことである。二つ目は、本研究で取り上げた以外に、前田が残している授業実践の記録の検討である。三つ目は、前田の学校づくり論に対する詳細な考察である。

今後は、以上について見識を深めるとともに、教師としてこれまでに学んだことを実践に生かしたい。

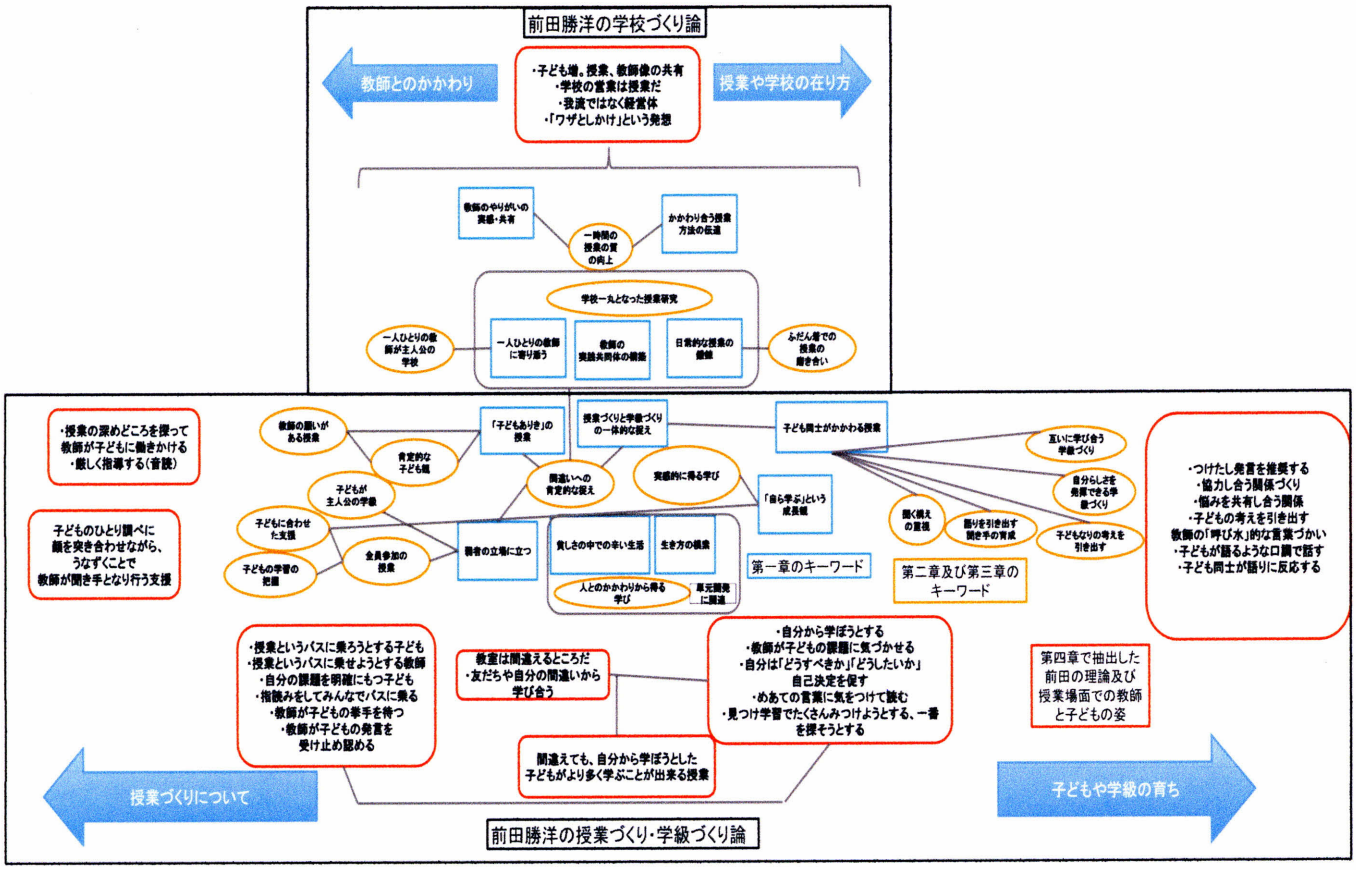

図４　前田勝洋の教育観の概念図

【参考・引用文献】

1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説　生活編』日本文教出版、平成 20 年、52 頁

2) 高井良健一「教職生活における中年期の危機−ライフヒストリー法を中心に−」、『東京大学教育学部紀要第 34 巻』、1994 年、326 頁

3) 小林多寿子「インタビューからライフヒストリーへ−語られた『人生』と構成された『人生』」、中野卓・桜井厚編著『ライフヒストリーの社会学』、弘文堂、1995 年、60 頁

4) 中野卓「歴史的現実の再構成−個人史と社会史」、中野卓・桜井厚編著『ライフヒストリーの社会学』、弘文堂、1995 年、193 頁

5) 前田勝洋・実践同人たち『授業する力をきたえる』、黎明書房、2007 年、8−14 頁

6) 前田勝洋・実践同人たち『授業する力をきたえる』、黎明書房、2007 年、15−23 頁

7) 前田勝洋編著・林知子、藤澤卓美、田中信夫執筆『教師のリーダーシップ力をきたえる』、黎明書房、2010 年、41 頁